

艦娘とかいう奴らに変態すぎる【一部完結】

キ鈴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔、海から来たUMAみたいな奴らから人類を守ってくれる『艦娘』という奴らが現れた。

彼女達はそれはもうドツタンバツタン大騒ぎしながら敵を倒してくれた。全ては『提督』の為に。

戦争終結から100年。すっかり人類の生活に溶け込んだ艦娘達は溜まっていた……性欲が。

提督のいなくなった世界で提督しか愛せない彼女達は発散させる事のできない性欲に苦しんでいる——これはそういうお話。

目次

ブラコン型駆逐艦：曙②

痴漢型軽巡：阿賀野	1
ストーカー型空母：加賀①	8
ストーカー型空母：加賀②	16
強姦型駆逐艦：不知火	28
型駆逐艦：曙	39
幸福型駆逐艦	49
【第2部】 双子編	
ブラコン型駆逐艦：曙①（プロローグ）	55
シヨタコン型練巡：鹿島①	64
腐敗型潜水艦：伊13①	75

痴漢型軽巡：阿賀野

昔、といつても1000年ほど前に人類は海からやってきたUMAみたいな奴らと戦争をしていたらしい。

UMAみたいな奴らはめちゃくちゃ強いというか変なバリア？みたいな物を張っていて人類側の攻撃は全く通用しなかった。

そんな時に現れたのが我らがヒーロー艦娘だ。

彼女達は人類に極希に現れる「提督」適性を持つものに特別な感情を抱き、その提督の為にそれはもうバツタンバツタン敵を倒しあつという間に戦争を終結させてしまった。

戦争終結後、一人の艦娘は提督に愛を告白しその後の人生を添い遂げたそうだ。

……問題は残された艦娘達だ。人類とは身体の構造が根本から違うのであるう艦娘は当時の姿のまま1000年経つた今も生きている。そして1000年間溜めこんでいる……性欲を。

戦争が終わり、提督が必要となくなつた世界で提督しか愛せない艦娘達はその性欲を

100年間発散できていないらしい。

だから俺達【提督】適性を持つ者の間では一つ暗黙の了解がある。『艦娘を見たら逃げろ。でないとめちやくちやにされるぞ』と。



ガタンゴトンガタンゴトンと揺れる電車に乗り会社に向かういつもの月曜朝7時。

満員電車の為さつきから誰かの手の甲らしき物が俺の尻に当たっているのがなんとも気色悪い。だがまあ仕方ない。これだけ混んでいるのだから。

運が良かったな同士おっさんよ。もし俺がJKだったらここがお前の人生の終着駅だったぞ。

．．．

やべえ……やべえよ……このおっさん完全に俺の尻揉んでる……最早揉みしだいて

る……。

【悲報：おっさんほmだった】

しかし23歳男の俺が『この人痴漢です！』等と言える訳もない、そっちのが恥ずかしいわ。

これはもう仕方ない、自分で注意して止めさせるしかない。そう思い俺は後ろを振り返った。

「おい、お前いい加減に……」

俺は尻を触っていた奴の顔を確認して直ぐに前を向き直した。心臓がバクバクと早鐘、冷や汗が頬を伝う。やべえよ……やべえよ……

勝手に勘違いしていたが尻を触っていたのはおっさんではなく女の子だった。気づいて見れば背中に柔らかい物が当たっている気もする。それだけなら俺も捨てたもんじゃねえなと寧ろ喜んでいたかもしれないが問題はそいつがタダの人間ではなかったという点だ。そう痴漢魔の正体は艦娘だった。

英雄艦娘大全で見たことがある。白を基調としたセーラー服を何故かノースリーブへソ出しルックにした痴女みたいな艦娘……阿賀野型だ。たしか今は……

「阿賀野ですよ、提督」

「ヒッ」

耳元で囁くと同時に息を吹きかけられ全身に鳥肌が立つ。

俺のケツが艦娘に捕まってしまった。今捕まっているのは尻だけだがもしかしたら誘拐されて100年分の性欲をぶつけられてしまうかもしれない。壊れちゃうううう。

どうする……! どうする俺! 俺が考えている間も阿賀野は尻を揉み続ける。さわさわと全体を撫で回すように触っているかと思えば急に驚掴んだり割れ目に指を立てたりと俺のケツで好き放題やってくれている。正直気持ちいい。だがここでこの快楽に流されて仕舞えば一巻のおしまい。きっと俺は永遠にこいつの如何わしい玩具にされてしまうだろう。

「提督、意見具申します。阿賀野眠くなってきたやいました……次の駅で降りて一緒にお昼寝しません?」

ここで反応してはダメだ、俺が提督だと認めたらアウトだ。交通事故にあった時は相手に謝ると自分の非を認める事になるから絶対にダメだってじっちゃんが言ってた。多分それと一緒にだ。

「……もしかして気づいてないふりしようとしてます? ダメですよ、私達には仕えるべき人が直感的に分かるんですから」

さいですか……てか尻揉まれながら気づいてないふりとか無理ありますよね。

「ね? お昼寝行きましょ? ね?」

「いえまだ朝ですしこれから仕事がありますんで……」

「ふーんそんな事言うんですか。私ずっと貴方に会えるの待ってたんですよ?」

「んな事言われても……」

「まっいいですけど」

そう言つて尻を触る阿賀野の手は更にいやらしくなる。さつきまで尻しか攻めてこなかったのに今度は大腿などにも触れてくる。

「次の駅までに提督からイキたいって言うようにしちやいますから」

くそー！こいつ何て事考えつきやがる！このままこいつに乗せられてお昼寝（朝）してしまえば確実にパパにされちまう……！耐えろ……耐えるんだ俺！今は機を窺いひたすらにエネルギーを貯めるんだ。あつやば、勃つてきた。

『桜木町』

とてつもなく永い3分間を過ぎしようやく次の駅についた。

「どうします提督? お昼寝行きますよね?」

「……コクリ」

俺は黙って頷いた。

ガシャー……。

電車の自動扉が開き俺と阿賀野は人の流れに押し流される。俺は阿賀野よりも扉の近くに立っていたので一瞬だけ早く扉からでた。しかし未だ阿賀野の手は俺の尻を離すことはない。

今しかない!!ぶろううろう!

俺は痴漢されている間にために溜めた尻で尻を掴む阿賀野の手を吹き飛ばし一目散に走り出す。

「あつーちよつとー!」

振り返れば阿賀野はサラリーマン達の背中の壁に阻まれて俺を追って来られないよ。うだ。行けるっ!逃げられる!俺は後ろを振り返ることもせずひたすらに会社まで走った。



「マジでやばかった。怖かった」

会社の自分のデスクに座りようやく人心地つく。駅から全力疾走した為に全身が汗まみれだ。しかし、本当に逃げきれて良かった、あのまま逃げられずどこかに連れて行かれたらと思うとゾツとする。

しかし痴漢でマジで怖いんだな。女性が何も言えず無抵抗になってしまうのも分かる気がする。

「あいつにも注意するよう言っとくか……」

俺は今日の恐怖経験を活かして従姉妹に注意をしておこうとポケットのスマートフォンを取り出そうとした。しかしそこにあるはずのスマートフォンはなく代わりに得体のしれないものが出てきた。

「あれ？なんだこれ？」

スマートフォン代わりにポケットから出てきたのは一枚の紙切れ。何やら可愛いらしい丸文字でメッセージが書かれている。

『スマホを返して欲しかったら明日も同じ電車に乗ってくださいね』

「……まじかよ」

どうやら俺はもう一度阿賀野に会わなくてはならないらしい。

ストーカー型空母：加賀①

昔、といっても1000年ほど前に人類は海からやってきたUMAみたいな奴らと戦争をしていたらしい。

UMAみたいな奴らはめちゃくちゃ強いというか変なバリア？みたいな物を張っていて人類側の攻撃は全く通用しなかった。

そんな時に現れたのが我らがヒーロー艦娘だ。

彼女達は人類に極希に現れる「提督」適性を持つものに特別な感情を抱き、その提督の為にそれはもうバツタンバツタン敵を倒しあつという間に戦争を終結させてしまった。

戦争終結後、一人の艦娘は提督に愛を告白しその後の人生を添い遂げたそうだ。

……問題は残された艦娘達だ。人類とは身体の構造が根本から違うのであるう艦娘は当時の姿のまま1000年経った今も生きている。そして1000年間溜めこんでいる……性欲を。

戦争が終わり、提督が必要となくなつた世界で提督しか愛せない艦娘達はその性欲を

100年間発散できていないらしい。

だから俺達【提督】適性を持つ者の間では一つ暗黙の了解がある。『艦娘を見たら逃げろ。でないとめちやくちやにされるぞ』と。

◇ ◆ ◇

俺はパンツを一着しか持っていない。

いや、待ってくれ行かないでくれ、話を聞いて欲しい。

俺が下着を一着しか持っていないのには理由がある。何も好き好んでの事ではない。俺のパンツは盗まれたのだ。それも一着や二着ではない、俺が一度穿いたパンツは必ず盗まれ、100を越えるパンツが盗まれたところで俺は失ったパンツの枚数を数えるのを止めた。

もちろん最初は犯人を捕まえてやろうと有給を取得し丸一日家を見張っていたこともあったが失敗に終わった。犯人は俺が家にいる間は絶対に盗みに入らないのだ、まるで俺の行動を完全に把握しているかの様な不気味さだった。

警察に事情を説明したが何故か俺の話聞いたポリスマンは苦笑いを浮かべそれは

災難だったねの一言で済ませ相手にはしてくれなかった。腐ってやがる。

そんな理由で俺はこうして毎日の仕事帰りにコンビニに立ち寄りパンツを購入するのだ。決して青と白のストライプの制服をきた店員さんにセクハラをしたい訳ではない。毎回同じ店員さんの立つレジで購入してはいるがそれは偶然というものだ。



21時00分コンビニでいつもの様にパンツを購入し帰路につく。良かった……今日是在庫があった……。運悪くパンツを確保出来なかった次の日は今日と同じパンツを穿くかノーパンで出社するかの一択を迫られるのでシャレにならない。特に明日は阿賀野とかいう痴漢ちかんむす娘と再び会う必要がある為絶対にノーパン等という低武装で出社することは避ける必要がある。

嫌だなあ……会いたくねえよ……。けどあいつに奪われたスマホには取引先や知人の連絡先、何より俺の汗と涙の結晶であるソシャゲのデータが入っている為諦めることはできない。くそお……引き継ぎコードの発行を怠ったがために、ってしまった今日はまだログインしてないじゃねえか。折角2年間欠かさずログインしてきたのにその努力が無になるのか……。いや、方法はあるにはあるが……仕方ない、ちようど電話

ボックスもあることだし手段を選んでいる時じゃない。

電話ボックスに入り中にある公衆電話に十円玉を3枚投入してボタンを押す。電話をかける相手は俺オレ自身のスマホ。

Prrr 『ハイ！提督さんの携帯です！現在主人は留守にしていますので妻の阿賀野が対応致します！』

出るの速えよ、つーか色々ツツコミどころが多すぎる。

「誰が妻だ、誰が」

『んー？この感じもしかして提督さん!?ヤダっもしかして明日まで待たなくて電話かけてきたんですか?もちろん阿賀野はいつでもOKです!今どこにいますか?阿賀野はどこに行けば

「ソシヤゲのログインしとけ」ガシャン

用件だけ伝えて速攻電話を切った。やっぱ艦娘はやバイ。何で1コールも終わらないうちに電話に応答してんだ明らかにオレのスマホ弄ってただろ、それに妻ってなんだ主人ってなんだ。まさかあいつの俺のスマホを使って変なことしてんじゃないだろうな……

話をしたのは数秒だったが艦娘とかいう奴らのヤバさを再認識するには十分だった。



「ただいまっ」と

もちろん返事はない。この古びたILDKのアパートには俺しか住んでいないのだから当然だ。

取り敢えず一日の汗を流す為にユニットバスにお湯を張り体の芯から温まったあと43度に設定した熱々のシャワーを頭から浴びた。さて明日はどうしたものか……このままおめおめと阿賀野の元へ行けば捕まってしまう可能性が高い。阿賀野一人なら何とかなるかもしれないが艦娘大全によれば奴には3人の妹がいたはずだ。もしもそいつらを呼ばれていたなら完全にゲームオーバーだ。

やっぱスマホ諦めるしかないのかなあ……。でもなあ、時間もお金も沢山かけたしなあ……。

風呂から上がり寝巻き代わりのジャージを着た。もちろん先程購入したトランクスを着用しているのでノーパンではない。

髪をタオルで拭きながらリビングのソファにダイブした途端に睡魔が俺を襲う。週の初めから阿賀野や下着泥の件と悩みの種が多すぎて疲れていたのだろう。このまま眠ってしまおう。そう思ったところで眠気を吹き飛ばす事態が発生した。

『んっ……んっ』

寢室の方から声が聞こえた。聞こえてしまった。それも何だか艶めかしい声と共に小さな水音が。俺は額を抑えながら天井を仰いだ。

くそお……ついに下着ドロと鉢合わせたってことか、いや、俺にだって心の準備つてのがあつてこんな急にこられても困るんだが……。

しかしここで奴を捕まえればもうこれ以上パンツを購入する必要はなくなる。いくら安物といつても枚数が枚数だけに消費も馬鹿にならない。どうする？警察を呼ぶか？ダメだその間に逃げられるかもしれない、俺が今ここで決着をつけるしかない。

俺は覚悟を決め寢室の襖に手をかけ一気に開いた。

電気の消えた真つ暗な部屋の中で一瞬何がゴキブリの様に這い回りタンスの裏に隠れたのが見えた。俺は電気をつけ戦闘体勢の構えを取りながら侵入者に語りかける。

「タンスの裏に隠れているのは分かっている。悪いようにはしないから出てこい」

.....

返事はない。

「もう一度言う。これは命令だ」

ピクつと命令という言葉に反応したのか少し動いたような気配があつた後、侵入者はゆっくりと、しかし堂々と姿を現した。

トランクスを被ってはいたがそれはもう威風堂々としたものだった。白い道着に青を基色とした袴、その格好に相応しく背筋をピン伸ばした姿は美しいとすら思えた。俺のパンツを被ってさえないければ。

「いいか、頭の後ろで手を組んでゆっくりその場に正座しろ。変な気は起こすなよ」俺の指示に従いその場に座る変質者。どうやら抵抗する気は本当にないらしい。

ゆっくりと近づき奴の被っているトランクスを引っ張る。鼻の辺りまで脱がしたところで侵入者が急に動き出し抵抗を始めた。

「これは譲れません」

「やかましい！俺のパンツだ！」

抵抗する侵入者の言葉を無視して勢い良くパンツを引き抜いた。パンツの中から現れたのはサイドテールという可愛らしい髪型ながらも能面の様に感情を窺う事のできない無愛想な顔。

俺は戦慄した。だって俺はこいつを知っている。危険回避の為に読んだ艦娘大全で何度も見たことがあったから。確かこいつは正規空母の――

「頭にきました」

誇り高き一航戦 正規空母加賀だった。

【艦娘大全もくじ】

痴漢型軽巡	P 1
ストーカー型空母	P 5
強姦型駆逐艦	P 10
盗撮型重巡	P 14
シヨタコン型戦艦	P 15
束縛型潜水艦	P 20
???	P ???

ストーカー型空母：加賀②

阿賀野と加賀。この2人の艦娘^{変態}と出会う前に俺は一人の艦娘と出会っていた。

あれは13年前、俺がまだ小学3年生の頃の事だ。あの日俺は夏休みを利用し家族総出で九州にあるひいばあちゃんの家遊びに来ていた。ひいばあちゃんの家は町……というよりも村といった方がしっくりくるようなド田舎で周囲には何も無い。見えるのは川、田んぼ、山、青空くらいのものであった。

きっと今の俺があの場合に行けばうへえ……と嫌気がさしてしまうだろうが当時の俺にとつてはとても素晴らしいワクワクにあふれた町だった。

最初に俺が選んだ遊び場は川だった。水は澄み渡り淡水魚の様な綺麗な魚が泳いでいた。石の影に沢ガニを見つけた時のテンションの高まりを俺は今でも忘れない。俺の知っている川はどれも汚く濁り、そこに棲む生物だってアメリカザリガニやジャンボタニシくらいしかいなかった。この時の衝撃は凄まじかった。

俺は裾を捲りあげ裸足で川の中に入り夢中で沢ガニを捕まえた。きっと当時の俺は

このカニを沢山捕まえて家族皆で食べようなんて馬鹿な事を考えていたのだと想像に難くない。

ただただ馬鹿みたいにかニを捕まえ続けていた時だった。突然足場が悪くなりツルつと足を滑らせてしまった。

(やばっ、こける)

正直コケるのは構わない、やんちゃ坊主だった俺は少々の痛みには慣れている。ただびちやびちやに濡れ服を汚してしまうと母さんから怒られる、それが怖かった。だがもう体勢を立て直すことはできない。大人しくげんこつを受け入れようと覚悟を決めた時。

がしっ

倒れる俺の腕を誰かが掴み助けてくれたのだ。俺は体勢を崩したままの状態で首だけを動かし救世主の方へ顔を向けた。

そこにいたのは俺より二、三歳ほど年上と思われる少女だ。じつと少女の顔を見続ける俺に向かって少女は言った。

「気をつけなさいよねクソ提督」

みーんみーんとクマゼミが喧しく鳴く中、彼女の髪飾りについてはいる鈴がチリンと音を鳴らすのが確かに聞こえた。

これが俺と彼女の出会いだった。

それから彼女は毎日俺の遊びに付いてくるようになった。付いて来ないでくれと彼女に言った。当時の俺は女の子と遊ぶのは何だかとても恥ずかしい事のように感じたからだ。だけど彼女は「あたしの行く場所にあんたが先回りしてんのよ」と理由の分からない理論で一蹴した。

最初は仕方なく彼女の同行を許しただけだった。だけど流石は地元人、俺の知らない田舎の楽しみ方というものを知り尽くしていた。

彼女はカブトムシを見つけるのが上手かった。俺はカブトムシっていうのはずっと木にへばり付いているものだと思っていたがどうやらそうではないらしい。

「そこ、掘ってみなさい」

俺は言われるままに木の根元をスコップで掘った。するとザックザックとカブトムシやクワガタが出るわ出るわ。俺は興奮の余り両手にカブトムシを掴んで彼女に突きつけた。と同時に殴られた。どうやら彼女はあまり虫が得意ではないらしい。

彼女はひまわりが好きな少女だった……と思う。思う、と言うのは直接彼女の口から

ひまわりが好きだと聞いた訳ではないからだ。そもそもあまり素直な性格ではなかったので何かを好きと言うような事自体がなかった。

だが彼女は度々俺をひまわり畑に連れて行つた。そこでは沢山のひまわりが咲いていた。正直花になんて興味のなかつた俺はひまわりの種を一粒とって口に放り込み――吐いた。

「ばかね」

と、彼女は笑つていた。

彼女は秘密基地を作るのが上手かつた。もちろん木々の間に小屋を立てるような本格的な物ではなく、俺の身長くらいの雑草？を結び合わせて作つた簡易的なものだ。

俺は彼女に教わつた通りに雑草を結び合わせドーム状の基地を作つていく。

「ちよつと！あんまり大きいのじゃなくて小さいのを作りなさいよ！」

えー俺はおっきいのがいいよ。と不満を垂れた。

「馬鹿つあんまり大きいとあんたと密着できな……じゃなくて基地がもろくなるでしょ！」

と顔を真っ赤に染めた彼女に怒られた。

彼女は釣りが得意な少女だった。彼女が釣り糸を垂らせば直ぐに魚が食らいついた。「ふふーんどうよ。海に行けば秋刀魚だって沢山とつちやうんだから！」

と彼女は得意げに言っていたがやはり虫は苦手らしく俺は毎回彼女の釣り針にイモムシを付けて上げていた。

そんな風に俺は9歳の夏を彼女と過ごした。

ある日の夕方、彼女との別れ際にふと疑問になつて彼女に訪ねてみた。

「お姉さんはどうして俺と遊んでくれるの？」

彼女は一瞬言葉に詰まったが直ぐにこう応えた。

「あんたが提督であたしがあたしだからよ」

「よくわかんない」

「いいのよ分かんなくても。とにかくあたしがずっとずっとあんたと一緒にいてあげるわよ……つて何言わせるのよ！」

急に自分のセリフに恥ずかしくなつたのか彼女は怒つてどこかに行つてしまった。

ずっとずっと一緒に居てあげる。この言葉で俺はようやくあることに気づいた。

(俺、もう直ぐ地元に戻るつて言つてないや)

きつと彼女は俺がずっとこの町にいると思つている。そう気づいた。

あれだけ煩かったクマゼミはなりを潜め、代わりにツクツクボウシが静かに夏の終わりを知らせ始める8月25日のことだった。

それから俺は何度もそのことを彼女に伝えようとした。だけどいざ言うぞというところで何だか照れくさいような、悲しいような今までに感じた事のない気持ちに阻まれ、結局彼女に伝える事が出来なかった。

8月30日。俺がこの町にいられる最後の日。今日こそはちゃんとさよならを言うぞと意気込んでいたが結局夕方になってしまった。ダメだ、今日は絶対に言うんだ。言わなきゃダメだ。そうやってもたもたしている間に彼女はいつものように別れを告げる。

「それじゃ、また明日ね」

俺は息を吞んで胸が張り裂けそうになりながらもこう応えた。

「うん、また明日」

これが彼女との最後の会話だった。

それから数年後、自衛の為に読んでいた艦娘大全で彼女が駆逐艦曙であると知ったの

だった。



「何か申し開きはあるか？」

「ないわ」

「あれや！」

下着泥棒と遭遇後、俺は風呂場にあるシャワーのホースを引きちぎりそれを用いてこいつを縛った。縛られている間もこの艦娘は全く抵抗することはなく不気味なことこの上ない。

「ちつ、この半年俺のパンツ盗んでいたのはお前つてことでもいいんだな？」

「そうね」

「ちつたあ申し訳なさそうにしろよ……」

この野郎、拘束された現在も全く悪びれる様子もなく平然としていやがる。

「この部屋にはどうやって入った」

「私が艦娘で貴方が提督だと言うことを大家さんに伝えたら快く合鍵を渡してくれたわ」

大家あゝ。大体この国は艦娘に甘すぎる。そりやあ確かにこいつらはこの国を深海棲艦とかいう奴らから救った英雄なのかもしれない。それでも許される事と許されない事はあるだろうが……。

——いや、本当は分かっている。国はこいつらに手を出さないんじゃない、出せないんだ。

人類が勝てなかった深海棲艦を早々に全滅に追い込んだ艦娘。つまり、万が一にも彼女らの機嫌を損ねて実力行使に出られるなんて事態にでもなれば、深海棲艦に手も足も出なかった人類が抗えるはずもないのだ。だからこの国は艦娘達を英雄として扱い、角が立たないような法の外の存在として認めている。

幸い艦娘達は心優しく良識人ばかりの為、これまでに事件らしい事件は起きていない。…はずなのだが。

「提督、先程私から没収した下着を返してください」

明らかに良識とか理性とかをどこかに落としてしまっているようにしか見えない。

「ふざけんな。つーかまらずは俺から盗んだパンツを返せ」

「それは無理ね」

「んでだよ」

「貴方の下着は今私が着ている服の生地になったもの」

「・・・」

ダメだ、もうほんとダメだ。イッてやがる。ぶっ飛んでやがる。

「替えの下着なら置いておいたでしょう？それを着てください」

「女物なんぞ穿けるか！せめて男物用意しろや！」

「私は男性用の下着なんでもっていません」

「あれお前が着ているやつだったのかよ!？」

ダメだ、こいつが喋る度にツツコミを入れさせられてしまう、体力が持たない。

「提督……ひとついいかしら」

「……んだよ」

「出来れば下着はトランクスではなくボクサータイプにして欲しいわ。その方が蒸れて臭うと思うから」

「やかましい！」



このままでは完全に加賀のペースだと感じた俺は一時撤退しコーヒーを飲み冷静になる事にした。

冷蔵庫からコーヒーの入ったペットボトルを取り出しコップに注ぎブラックのまま仰ぐ。

しかし、妙だ。100年分の性欲を溜め込んでいるこいつらは提督である俺達を見つけると同時に襲ってくるはずだ。だが今ここにいる加賀はとりあえずは俺の命令に従い大人しく縛られている。恐らくこれが今朝遭遇した阿賀野だった場合一も二もなく俺はめちやくちやにされていたことだろう。

この加賀が特別理性的なのか？いやそれは無い断じてない。そうでないと俺の奪われたパンツが浮かばれない。

「おい加賀、お前は性欲をコントロール出来ているのか？」

「いいえ、全く」

「ならどうして俺を襲わなかった？今朝あった他の艦娘は問答無用だったぞ」

「他の艦娘に会ったの？」

今まで感情の伺いしれなかった顔に少しだけ苛立ちが見て取れた。なんだ？あまり

艦娘同士の仲は良くないのか？

「いいから俺の質問に答えろ」

「……私達艦娘は100年分の性欲を溜め込んでいる。そしてその欲望とも言える感情を受け止められるのは、貴方達提督適性を持つ人だけ。ここまでいいかしら」

「ああ、理解している」

「だからその……私達は貴方の私物とかあればとりあえずはその欲望の捌け口にできるの。貴方だって如何わしい本やビデオがあれば1人でもできるでしょう？」

「……なんだか雲行きが怪しくなってきた。」

「おい、まてどういふことだ」

「要するに……お世話になりました」

「聞きたくなかった……。なんで俺は盗まれたパンツをオカズにしてみました宣言を本人から受けなくちゃならんのだ……もういやだ。」

「つまりお前は自家発電で性欲を発散していたから理性を保つ事が出来たと？」

「そういうことね」

「なんでこいつはこんな平然としてられるんだ。俺だったら自殺もんのカミングアウトだぞ……」

「提督、私からも質問いいかしら」

「言ってみろ」

「さつき私以外の艦娘に遭遇したと言っていたけれど誰のことかしら」

「阿賀野とかいうのだよ。ほらへソ出しノースリーブの」

「ああ……あの子達」

「ほんと災難だぜ。あいつらにスマホを奪われるしお前にはパンツを奪われるし」

「スマホを奪われたの？」

「ああ、あれには大事なデータが沢山入ってるから正直まいつてるんだ」

ボソツ「だからGPSが変な位置を示していたのね」

「なんか言ったか？」

「いえ、何でもありません。ところで提督、一つ提案があります」

「……なんだ」

「そのスマホ、私を取り返してあげましょうか」

毒を制す為に毒を利用する。きつとこの時の俺は1日に2人の艦娘と遭遇し疲れきっていたのだと思う。だから正常な判断ができなかつたんだ。

だって普通に考えれば想像できたはずだ。毒と毒を混ぜればより強力な劇物になる
何てことは。

強姦型駆逐艦：不知火

「提督、コンドームはいくつ買っておけばいいかしら？」

「必要ねーよ、ダボが」

「……そう、避妊は必要ないということね。流石に気分が高揚します」

「お前ちよつと黙ってるな？」

深夜24時、変態ストーカー空母加賀の申し出により阿賀野討伐共同戦線を張った俺達は作戦に必要な道具を手に入れる為に最寄りのローオンにやって来ていた。加賀はここまで出向いた目的を失念しているのかさつきから妙齢の女性が口にするべきではないような言葉ばかり口に出している。幸いにも深夜の店内には俺達以外の客はおらず、白い目で見られるような事はなかったのが救いだっただ。

「おら、さつきとレジに行くぞ」

「そうね。早く私達の家に帰りましょう」

「……一応言っとくがお前は自分の家に帰れよ？」

なにこいつサラッとか俺の家に上がり込みもうとしてんだ。

「だめよ、明日の打ち合わせをしないとイケないわ。これの使い方説明しないと」

加賀は買い物カゴを持ち上げそう言った。カゴの中には多種多様な物が入っており確かに俺にはこれをどう使って阿賀野を撃退すればいいのか想像すらできなかった。

「……今日だけだぞ」

「鎧袖ちよろい一触いね」

「しびくぞ」

レジで買い物物を済ませ店外へでる。何故か加賀が店員さんとおでことおでこがぶつかりそうな距離でメンチを切り合っていたので頭を引っぱたき店外へひきずり出した。あの店員さんには良くしてもらってるんだ、迷惑かける奴は許さん。

「まって提督、あの店員は——」

「やかましい、とつとと帰ってミーティングするぞ」

「……わかったわ」

加賀は何だか納得いかないという様に不満げな表情を浮かべたがそれでも俺の横に立ち帰路につく。

月明かりとまばらに立つ街頭のか細い光を頼りに2人して深夜の道を歩く。3月も終わりが近く最近では春の訪れを肌で感じられる程度には暖かくなってきていたがそ

れでも日の沈みきつたこの時間帯は若干の肌寒さを感じた。

「加賀、寒くはないのか？」

何故かそんな言葉が口から漏れた。あまり生地の厚くなさそうな道着に丈の短い袴といった服装があまりにも寒そうに見えたからだろう。第一印象は最悪だったとはいえ、こうして2人で話をするうちにこいつが悪い奴ではないと分かり、俺は心の扉を開け始めているのかもしれない。

「大丈夫よ。貴方の下着で作ったこの服はとても温かいの」

「今すぐ脱げ」

そつと心の扉を閉めた。

「つーかこんなもんで本当に阿賀野を倒せるのか？」

ガサゴソと大量の商品がつまったレジ袋の中に手をツツコミ商品の一つとりだす。出てきたのはカ○ビーが販売する国民的お菓子、サツポ○ポテトバーベキュー味。

「こんなもんでどう使うんだ？」

あれか？サツポ○ポテトには艦娘の嫌う成分が含まれているとかそういう感じか？

「好きなの、サツポロ○テト」

「おめーが食う用かよ!!」

掴んでいたサツポロポテトを加賀に投げつけた。

「提督止まって。何かいる」

阿賀野を何とかしたらこっさり引越しをして加賀との関係を絶ってしまおうと考えていると加賀が急に制止をかけた。先ほどまでより若干声が低く何やら異様な雰囲気漂わせている。

「何かってなんだ」

辺りを見渡すがこれといって何か気になるものはない。

「12時の方向真正面、誰かがこちらに近づいてくる——」

加賀の指さした方向に目を向ける。月明かりしか頼りのない現状ではよくわからないうが確かに誰かがいるのが確認できた。

「いや、普通にこの辺の住人だろ」

「違います、この感じは——」

加賀は何故か警戒を続ける。その間に謎の人物はゆっくりと足音をたてながらこちらに近づいてくる。俺たちとの距離がおよそ5 m程になったところでようやく俺はそいつの顔を認識することができた。

「ようやく見つけました司令」

中学生の制服の様な格好に薄いピンクの髪色、そして何より特徴的なのはその視線だけで人を殺せそうなほど鋭すぎる眼光、確かこいつの名前は

「不知火です。ご指導ご鞭撻よろしくです」

「提督下がって」

加賀が不知火から守るように俺の前に立つ。くっ、ちよつとかっこいいじゃねーか。

「彼女、かなり危ない状態ね。正気を失いかけてる」

「正気を？」

「精神的に未発達な駆逐艦の娘達にはよく見られる現象なの。性欲に理性が負けてしまってるのね。捕まるとその場で犯されるから気をつけて」

加賀、それにあの痴漢娘ちかんむすである阿賀野ですらまだ理性的だったってことか……。強姦娘ごうかんむすなんて冗談じゃない。

「加賀さん、司令を不知火に渡してください」

「それはできません。彼は私の提督です」

「『私の』ですか。ですが司令に《提督》適性が、そして加賀さんがまだ《艦娘》であるところを見るにまだ結ばれている訳ではなさそうですね」

「そうね、『まだ』ね。ですがこれから帰って襲うつもりです」

おい今何だった。

「では不知火はぎりぎり間にあったと言うことですね。ここであなたから司令を奪います」

不知火の眼光が俺を捉える。その鋭すぎる眼光に威圧され俺の体は金縛りにあつたかの様に硬直してしまった。

「大丈夫よ提督。私が貴方を守ります」

そつと加賀が俺にそう言った。今まで変態でイカれたヤローだと思つていなかったが窮地においてはここまで頼りになる奴だったのか。加賀の言葉で金縛りからも脱出できた。

「貴方に提督は渡しません」

加賀と不知火が同時に舗装された地面を蹴り互いに接近する。加賀は手刀、不知火は拳で相手を攻撃する。

「くつ、ちよこまかと」

「それはお互いさまね」

加賀と不知火、どちらも回避に優れているらしく両者の攻撃は相手にヒットしない。無為に空を切るばかりだ。だが突如加賀は両足の踵を地面につけ回避の構えを解いた。

「何の真似ですか」

「別に。ただ私は貴方の攻撃を躲す必要がないと気づいただけだよ。駆逐艦の火力では空母の装甲は破れないのだから。私はカウンターを合わせるだけでいい」

「後悔しますよ」

不知火の拳が加賀の腹部に目がけて放たれる。速く、重い一撃。恐らく俺が食らえば腹に大穴が空いているだろうとんでもない威力だと想像できる。

「沈め」

ドゴン という凡そ拳から発せられたとは思えないような音の後、加賀は……倒れた。

「私が今身につけているのは艦装ではなく提督の下着……だったわ」

一瞬でも変態空母をアテにした俺が馬鹿だった。あいつはダメだ。もう阿賀野も俺一人で何とかしよう。

取り敢えず俺は回れ右をして元きた道を全力で引き返す。加賀は捨て置く。

背後からガツガツガツとアスファルトをえぐりながら不知火が追ってくる音が聞こえる。このままでは捕まるのは時間の問題だ。

（そうだ！）

先ほどローソ○で対阿賀野用に購入した物を思い出す。阿賀野討伐用とはいえ同じ艦娘だ恐らく不知火にも効果があるはず……！使い方わかんねえけど。

ガサゴソとレジ袋の中を漁る。

（これだ！）

俺はレジ袋の中から一つの商品を取り出した！これで不知火を倒す！

俺の右腕が掴んでいたのは

「サツポ○ポテトじゃねーか！」

レジ袋ごと不知火に投げつけた。

（くっそ！どうすりゃいいんだよ！）

考えながらひたすらに走っていると今度は前方に人影が見えた。まずい、このままでは不知火と激突してしまうかもしれない。

「おい！逃げろ！直ぐ後ろに暴走した艦娘がいるんだ！巻き込まれるぞ！」

「加賀さんの帰りが遅いから迎えに来てみれば……。安心して提督さん、この瑞鶴が来たからには提督さんには指一本触れさせないんだから！」

提督さん？加賀さん？瑞鶴？加賀の仲間ということか？瑞鶴という名も艦娘大全で見たような気がする。混乱していて状況が理解できないが敵ではないようだ。

「五航戦瑞鶴出撃よ！」

瑞鶴は手刀を、不知火は拳を握って互いに接近する。あつこれさつき見たやつだわ。
「沈め」

「忘れてた……。私が今着てるの提督さんの下着だった……」

登場から10秒で瑞鶴は沈んだ。

「空母には馬鹿しかいねえのか！」

現在不知火と俺の距離は約3 m、もう逃げられない。

「司令、観念してください」

不知火はゆっくりとゆっくりとこちらに近づいてくる。俺は蛇に睨まれたカエルの様に動くことができない。やがて不知火の腕が俺の肩にかけられ大外刈りの要領でその場に押し倒されてしまう。

「二度結ばれてしまえば司令はもう不知火だけの提督です」

そう言いながら俺の着ているパーカーのファスナーに手をかける。

「100年待ちました……不知火はもう我慢の限界です。少し乱暴になつてしまいかもしれませんが許してください」

不知火に覆いかぶさられ見えるのは彼女の顔と夜空に浮かぶ月だけ。ああ、こんな路上で俺は犯されるのか。しかも見た目こんな中学生みたいな奴に。

別に艦娘が嫌いとか人間じゃないとか差別をしている訳ではない。ただもつと自由でいたかった。少なくとも30代前半までは誰にも縛られずふらふらと責任のない人生を送りたかった。だがここで不知火と提督と艦娘の契を躲してしまえばそうはいかなくなる。俺は20代前半にして残りの人生を不知火と過ごすことになるのだろうか。ここで未来が決定してしまう、それが堪らなく嫌だった。

「むっ、忘れるところでした。司令、まずは契の口づけを」

不知火の顔が俺の顔に近づいてくる。先ほどまで見えていた月と重なりそれすらも見えなくなってしまった。不知火の俺を押さえつける力は凄まじくまるでビクともしない。

(もうだめだな)

諦めた俺はゆつくりと瞼を閉じた。

……?

おかしい、何時までたつても唇に何かに触れる気配がない。

俺はおそるおそる瞼をあける。だがそこにあるはずの不知火の顔はどこにもなく、先ほどまで見えていた月が輝いていた。

(不知火はどこに?俺が目を閉じている間に何かがあったのか?)

状況を理解できず混乱していると左方向に人の気配を感じた。慌てて俺はそちらに顔を向け臨戦態勢に入る。だがそこに立っていたのは不知火ではなかった。

「ようやく見つけたわよクソ提督。もう絶対に逃がさないんだから」

ちりん——と遠い夏の日聞いた鈴の音が聞こえた気がした。

型駆逐艦：曙

100年前、人類は深海棲艦とかいうUMAみたいな奴らと戦争をしていた。戦争とはいっても戦況は一方的なもので人類側の攻撃は一切通用せず敵の進攻を妨げるのが精一杯だった。このままでは人類は滅ぼされてしまう——そんな時に現れたのが艦娘だったらしい。

突如として現れた艦娘はその圧倒的な戦力で敵をバツタバツタと沈めまくった……が、如何せん連携というものが取れていなかった。敵との戦闘は全て自己判断と個人技によるもので戦略と呼べるものではなく敵に敗れ去るものもいたという。そんな状況を良しとしなかった人類は彼女たちに『鎮守府』と呼ばれる建造物と『提督』を彼女達に譲渡した。

提督の表向きな役割は彼女達への戦術指南、裏向きには艦娘達の監視だというのは恐らく当時の人間も艦娘本人達も気づいていたことだろう。

だが艦娘達は提督を大いに歓迎し、提督の指示には従順にしたがったという。

そして5年後、提督の存在により戦略的にもそして何故か性能的にもパワーアップを

果たした艦娘達はそのわずかな期間で深海棲艦を殲滅し戦争は終結した。

人類は彼女達に感謝し、何か恩返しはできないかと尋ねた。彼女達は答えた。

『普通の人間として生活したい』

人類はその申し出を快く了承し陸に招き入れた。

そして艦娘達が鎮守府から旅立つ別れの日、10名の艦娘が提督の前に立ち手を差し出してこういった。

『私と一緒にきてほしい』

紛れもないプロポーズだった。提督は理解していた、この差し出された全ての手を握り返す事も可能だと。だが提督が握り返したのはたつた一人分の手だったという。

これが『始まりの提督』と呼ばれた俺の曾祖父の物語だ。

俺はこの話を聞かされて思った。

「全員と結婚しとけやクソじじい」

そうすれば俺が襲われる可能性が少しでも減ったかもしれないねえのにと。

だが阿賀野^痴や加賀^漢、瑞鶴^カそして不知火^強と出会ってわかった。

「あつ、こいつら複数人なんて手に負えるわけねえわ」と。

ようやく爺さんの気苦労を理解した。



「よくもあたしに何も言わず姿を消して13年も放置してくれたわね」

草木も眠る丑三つ時、強姦娘^{ごうかんむす}不知火に襲われ間一髪のところを曙に救われた俺は何故か自室にて正座させられていた。

「違うんだよボノ姉え」

「ボノ姉え言うな」

「ええ……、でも昔はそう呼べって」

「昔の話でしょ。それに今はこの3人もいるし」

そういつて曙は俺の後ろで正座している加賀、胡座をかく瑞鶴、縛られ猿轡をはめられ転がされている不知火を指差した。最後の奴は中学生のような姿なのでかなり危ない絵になっているが一番やばい奴なので仕方がない。

1時間前、不知火に襲われていた俺を助けた曙はそのまま不知火を戦闘不能にした後、持参していたワイヤーで拘束しそのまま俺の自室へと運び込んだ。道中、気を失っている加賀と瑞鶴もついでに回収しておいた。正直、空母の二人は放置しておいてもよ

かったのだがこいつらを目の届かない所に置いておくというのもそれはそれで不安だったのだ。多分ろくなことしないから。

「で？早く答えなさいよ。どーう！し！て！あたしに何も言わずに姿を消したのかを！」

「そんなこと言われても覚えてないよ……13年も前のことなんて」

13年という永い年月が過ぎた今でも俺はボノねえには頭が上がらないらしい。賀にはあれだけ強気な態度を取っていたというのに曙には全く言い返すことができない。心なしか口調まで当時のものに戻ってしまったている気がする。

「覚えてないですって？あんた最後あたしに何て言ったかも覚えてないって言うの？」

「……ぐめん」

『『また明日』って言ったのよ！だからあたしはずっとずっと待ってた！その日だけじゃない、次の日もその次の日もずっと待ってたのよ！』

あの頃の俺はガキだったしそもそも提督や艦娘がなんなのかすらよく理解していなかった。だから彼女にとつての俺はちよつと仲のよい友人、くらいにしか思われていないと考えていた。それがまさか13年経った今こうして当時のことで問い詰められることになるなんて夢にも思っていなかった。

「あんたがあたしを置いてどこかに行ってしまったと理解してからはひたすらあんたを

探した。名前も何処に住んでるのかも全く知らないあんたを13年間探したの。そして今日、日本を6周しようかというところですよやくあんたを見つけた」

ええ……。流石に執着しすぎじゃないですかね……。日本6周でなんだよ。

「それだけ日本を回ったなら俺以外にも一人くらい提督適性者がいたんじゃない?」

「は? あたしの提督はあんただけに決まってるでしょ。冗談でもそんなこと言わないで」

「すいません」

なんで謝ってんだ俺……。

「だけどようやく見つけた。ねえクソ提督、あんた私に悪いことしたと思ってる?」

「そりやまあ一応……」

あの時は提督やら艦娘やらが何か分かっていなかったとはいえ何も言わずに離れたのは不味かったかなと思う。そのせいで13年も俺を探す羽目になったらしいし。

「あたしにとつてあんたがどういう存在か理解した?」

「13年も探されたら流石にね」

「なら償いとして今ここで私だけの提督になってちょうだい」

「仕方な……ん?」

私だけの提督? どういうことだ?

「ちよつと待ちなさい」

「そうね、流石にそれは黙ってられない」

「又々又々又々」

曙の謎の発言に反応してそれまで黙っていた加賀と瑞鶴が突然立ち上がった。不知火は縛られ猿轡をはめられているので唸るだけだ。

「なによ加賀さん、瑞鶴さん今はあたしとクソ提督が話をしているの。邪魔しないで」

「そういう訳にはいきません。不知火から提督を守ってくれたことには感謝しています
がそれとこれとは話が別です」

「そうね、彼は私達の提督さんでもあるんだからそんな勝手は見過ごせない」

曙に詰め寄る加賀と瑞鶴。つーか流れで連れてきてしまったけど瑞鶴、お前は一体なんなんだ。突然現れて不知火に瞬殺されてなにがしたかったんだ。

「ちっ！クソ提督！なんで加賀さんに瑞鶴さんと一緒にいたのか説明して！不知火はいから！」



「あんたら2人ただのストーカーじゃないのよ！」

俺は今日一日にあったことを曙にかいつまんで説明した。痴漢娘の阿賀野にあったこと、ストーカーの加賀と出くわし手を組んだこと、そして不知火に襲われたことだ。つーか今日一日やばすぎだろ、厄日か。

「失礼ですね。私達は提督に近づく不埒ものがないか見張っていただけです」

「いや、それで下着盗んだりしないでしょ……。しかもそれを生地にも作るとか……」話の途中に知ったことだが瑞鶴と加賀は同じ家に住んでいるらしく毎日交代でこの部屋に侵入していたらしい。ボノねえもドン引きだ。

しかし2人の言っていることは要領を得ない。加賀と瑞鶴は俺を発見しながらもどうして不知火のように直ぐに姿を現さずそこそとストーカーのような……違った、ストーカー行為そのものをしていたのだろうか？まさかまだ何かを隠している？

「それにしても阿賀野さんにもちよつかいかけられていたなんて……あたしがもう少しくソ提督を見つければ……、いや、ここは間に合って良かったと考えるべきね。あと一日見つけるのが遅かったら確実にクソ提督を誰かに取られてた」

「だから提督は貴方の物ではないと言っているでしょう」

「ちつ、うるさいわね。そもそも加賀さんはクソ提督を守りきれなかったじゃないですか。あたしがこなかったら不知火に奪われてたわ」

「だからそれとこれとは話が別です」

にらみ合い火花を散らす曙と加賀（ついでに瑞鶴）。互いに一步も譲らない。
「罅があかないわね」

「そうね、そもそも艦娘が提督を譲ったりするわけないのだから当然ね」

「……もう白黒つけたいわね、クソ提督がいったい誰のものか」

おい俺はものじゃねーぞ、とは言えなかった。

「クソ提督、あんたのスマホの番号教えて」

「え？ いいけどさっき言った通り今は阿賀野に奪われてるから……」

「いいから」

俺から番号を聞き出した曙はそのままダイヤルを押し電話をかけた。いや、今は午前の3時だぜ？ 流石に阿賀野も寝てるだろ……。

プルルルという発信音が部屋中に響く、どうやら俺達にも会話が聞こえるようにスピーカーモードにしているらしい。

『もつしもーし、もしかして提督さん？ やっぱり阿賀野が恋しくなっちゃたとか？』

「クソ提督じゃなくて悪かったわね、曙よ」

『曙ちゃん？ どうして貴方がこの番号に……ふーんそういうことか、だいたい分かったかな。それで用件はなに？』

「クソ提督に近づくのは止めて」

『それは無理ね。曙ちゃんも分かっているでしょ?』

「でしようね。でもお互いに彼の周りをうろちよろされるのは嫌だ」

『……そうね。折角の提督との時間は邪魔されたくない』

「だから明日、恨みつこなしの一発勝負をしましょう」

『……いいわ、その勝負受けてあげる』

「詳しい場所と日時は追ってそのスマホにメールするわ。それじゃ」

ぴつ、と簡潔に阿賀野との会話を終わらせ通話をきる曙。なんか俺の意思が介入することなくどんどん話が進んでいつている。

「そういうことだから」

どういふことだ。

「明日、私、加賀さん、瑞鶴さん、阿賀野さん、あと一応不知火の5人でクソ提督がだれのモノか白黒つけましょう。負けた人は大人しく引き下がること」

「流石に気分が高揚します」

「五航戦を甘くみないでよね」

「ヌー！・ヌー！」

俺の意思を完全に無視する形でストーリーカーと強姦魔と痴漢魔の史上最悪の戦いの幕が上がるうとしていた。

【艦娘大全もくじ】

小悪魔型駆逐艦	P 26
女王型海防艦	P 27
腐敗型軽巡	P 29
幸福型少女	カバ―裏

幸福型駆逐艦

外から聞こえるホー、ホーという鳩の鳴き声とカーテンの隙間から差し込む朝日に眠りを妨害され目を覚ます。もぞもぞと芋虫のように動き枕元に置いてあるスマートフォンを掴み時刻を確認した。

「まだ5時かよ……」

俺が家を出る6時30分までにはまだまだ時間がある。ここでもう一眠りといければよかったのだが生憎眠りの浅い俺にそれはできなかつた。

「あんま早く起きると怒られるしな……」

隣で眠る妻を見る。すやすやと気持ち良さそうに寝息を立てているが両腕でしっかりと俺の服を掴んでいた。まるで絶対に俺を逃がさないとも言おうように。

「何処にも行かねえっての……」

そう呟いたがその言葉には余りに信憑性がないなど自分で笑ってしまった。事実、俺は1度妻の前から何も言わず姿を消した前例があるのだ。信用がないのも仕方がない。

優しく妻の手を引き剥がし寢室をあとにする。階段を下りリビングに入るとシーンと静まりかえった静寂が俺を迎えた。誰も居ないリビングは薄暗く聞こえるのはチツチツと一秒ごとに時間を刻むアナログ時計の音だけだった。いつもは騒がしい空間なだけに少し寂しさを感じる。まあ騒いでるのは妻と娘だけで俺と息子は大人しいものなのだが…。

明かりをつけ台所へ向かい先日買ったばかりのコーヒーマーカーのスイッチを入れる。コーヒーマーカーはコポコポとんだか間抜けな音を発しながらコーヒを一滴ずつマグカップに落とし始めた。

「おはよう、父さん」

声のした方を見るとパジャマを着た息子が目をこすりながら立っていた。

「おはようさん。どうした、起きるの早いじゃねーか」

「小春がひつついてきて眠れないんだ。暑くてしかたないよ」

そう言いながら息子は俺の後ろの冷蔵庫から取り出した牛乳をガラスコップに注ぎリビングにあるソファに腰掛けた。

「お前等もう10歳になるんだろ？そろそろ別の部屋で寝たらどうだ？」

「もちろん僕だってそうしたいよ。けど小春が絶対に嫌って言うんだ」

俺の息子と娘は双子の兄妹で一応息子の方が兄なのだが妹には頭が上がりないらし

い。

「情けない、お前も男なら自分の意見を通すくらいしてみる」

「無茶言わないでよ、小春は怒らせると怖いんだ。それに父さんだつて母さんの尻に敷かれてるじゃないか」

俺はコーヒーが注がれたマグカップを持って息子の座るソファの横へ腰掛けた。

「息子よ……母さんは怖いんだ」

「小春だつて怖いよ」

そう言う俺と息子は同時に肩を縮こまらせちびちびと手に持つ飲み物を飲んだ。どうしてこんな情けない所ばかり似てしまったのだろうと少し悲しくなった。

「ちよつと」

突然、リビングの入口の方から少し不機嫌そうな声が聞こえた。振り向くとそこには愛する妻が立っていた。

妻はパパパタと可愛らしいスリッパの音を立てながら俺の前までやってきた。隣を見るというの間にか息子の姿はなくなっていた。あの野郎なんて逃げ足の速さだ。

「いつも起きるのが早いよ、もう少し寝てなさいよ」

「悪い、何か目が冴えちゃってな」

「ここだけ聞き取れば妻に無茶苦茶な言いがかりを付けられているように聞こえるが

そう言う訳ではない。彼女にはいくつか譲れないポリシーというものがあるらしい。なので俺一つに『妻は夫より早く起きて朝食の支度をする』というものがあるらしい。なので俺がいつも今日と同じように余りに早く起きる為彼女の睡眠時間も短くなってしまっただ。

「別に気にせず寝てればいいのに」

「そもいかないわよ」

妻は先ほどまで息子がいた場所に座ると俺の持っていたマグカップを奪いコーヒーを啜った。偶然か狙ったのかは分からないが彼女が口をつけたのは俺が口をつけていた場所と同じ位置だった。

「ん」

そう言うって返されたマグカップを受け取る。別に夫婦なので今更間接キスなど気にする方がおかしいのだが何だが気恥ずかしくてマグカップを半回転させた……が凄く怖い目で睨まれたのもう半回転させ妻と同じ場所に口を付けた。

俺はリモコンでテレビの電源をつけた。早朝ということもあり放送されていたのはニュース番組だった。

『本日4/7は15年前に艦娘戦争が終戦した日です』

ニュースキャスターが過去に起こった事件を口にした。あの大事件の終わった日の

ことを。

15年前、国の英雄である艦娘同士の間で争いが起こった。初めは駆逐艦2人、軽巡1人、空母2人の計5人の戦いだった。だが争いは何日も続き争いを聞きつけた他の艦娘達まで集まり大戦争へと発展した。

戦争の原因は不明、だが艦娘達は戦い続けた。

一人また、一人と艦娘が傷ついた。彼女達に恩のある人類はなんとかその争いを鎮めようとしたが無力な人類にそれは叶わなかった。

だが信じられないことにその争いをたった一人の青年が鎮めたのだ。

「おい、艦娘戦争から15年だってよ」

俺は隣に座る妻にからかうように言う。

「分かってるわよ。確かにあの時は少しやりすぎたと思ってるわ。そもそも！さつさと決断しなかったあんたが悪いんだからね！」

俺の脇腹を振り唇を尖らせながら妻は応えた。

「……というか今日は他の日でもあるでしょ、分かってるんでしょうね」

先ほど間接キスを避けた時と同じような鋭い目つきで睨まれる。だが今回は怖くなくなった、彼女の欲している応えが分かっていたから。

「結婚15年記念日だろ？忘れてたりしねえよ」

「な、ならいいのよ」

気恥ずかしくなったのか妻は俯き俺から目をそらしてしまった。会話の途切れたりピングをまた静寂が包み込んだ。聞こえるのは時計の針の音だけ。

チク タク タク タク タク タク

静寂のまま秒針は時間を刻み続ける。未だ妻は俺の隣で黙り俯いたままだ。だけど不思議と居心地の悪さは感じない、むしろもつとこの時間を堪能したいと思つた。

突如2階の子供部屋の方からドタバタと誰かが暴れる音が聞こえた。きつと目を覺ました娘に息子が襲われているのだろう。

もうすぐ子供二人がこのリビングに降りてきていつものように騒がしい我が家になるのだろう。俺は家族団欒の騒がしい時間が好きだ。だけどこの妻との二人だけの時間が終わってしまうのが少し勿体なく感じ、最後に俺は妻に話しかけた。

「なあ……俺と結婚して幸せだったか？」

妻は顔を上げ驚いた表情を浮かべた。だけど直ぐに笑つて

「馬鹿ね——幸せにきまつてるじゃない」

そう言つて妻はまた照れくさそうに顔を背ける。そんな妻の動きに揺られ、チリン——と今も昔もまったく変わらないあの綺麗な鈴の音が我が家に響き渡つた。

【第2部】 双子編

ブラコン型駆逐艦：曙①（プロローグ）

昔、とは言っても100年と15年くらい前に僕達人間は“深海棲艦”って呼ばれるお化けみたいな敵と戦争をしてたんだって。

だけどそのお化けみたいな奴らはとつても強くて人間は一方的に攻撃を受けてたんだとか。

そんな人間を助けてくれたのが艦娘っていう女の子達。彼女達は自身の想い人である『提督』つて人を守る為にそれはもうドツタンバツタン大騒ぎしながら敵を倒しあつたという間に戦争を終わらせた。

戦争終結後、一人の艦娘は提督に愛を告白しその後の人生を添い遂げたんだって。

問題は残された他の艦娘達だった。僕達とは身体の作りが違う艦娘達は100年経った今もたった一人で当時の姿のまま生きている…すっごい変態さんになって。

僕のお父さんは言っていた。

『艦娘を見たら逃げろ。でないともちやくちやにされるぞ』と。

『ただどそう言った後にこうも言っていた。』

『まっ、逃げるだけ無駄なんだけどな。どうせ捕まるし』

そう言った後それを聞いていた母さんにスリッパで頭をスパーンと叩かれていた。

□□□

眼を開けると目の前には暗闇が広がっていた。寝転んだまま左腕を動かし枕元にあ
るはずのスマホを探すがなかなか見つからない。ならばと右腕も頭上へと動かそうと
するがこちらの腕はピクリとも動かない、代わりに熱すぎるぐらいの体温が伝わってき
た。まだ暗闇に目が慣れていないので確認はできないが恐らくは双子の妹である小春
に抱きかかえられているのだろう。

カッツと左手に硬質な何かが触れる感覚があった。それを掴み眼前へと持つてきて、
記憶を頼りにしているはずのボタンを押した。

ボタンを押すとスマホはその画面に明かりを灯す。画面にはいつの間にか設定され
ていた妹と僕のツーショットの待ち受けに現在の日時、時刻、バッテリー残量が表示さ
れていた。

「午前3時、いつもの時間だ」

ももぞと動き妹にホールドされていた右腕をなんとか引き抜く。かなり強く抱きしめられていたようで若干の痺れを感じた。

腕の代わりにさつきまで使っていた枕を妹に抱かせ立ち上がる。いつの間にか目も暗闇に慣れてきたようで明かりを点けずとも子供部屋の出口が確認できた。

そろり、そろりと足音を殺し出口へ向かう。ここで妹を起こしてしまえばきつとまた布団に連れ込まれてしまうだろう、それは避けたかった。

後ろで眠っているはずの妹は実は起きていて今僕の背中をじつと見つめているのはと不安になりながらも何とかドアの前にたどり着く。息を止めたままゆっくりとドアノブを下げ部屋を後にした。

「ふう〜。やつぱり緊張するね」

部屋を出て扉を閉めるとようやく酸素を取り込むことができた。心臓がばくばくと活発に動き体内に酸素をめぐらそうと必死になっている。

30秒ほどかけて呼吸を整え廊下の明かりを点ける。明るくなった廊下を進み階段を下った。

「あれ？明かりが点いてる……」

1階に降りるとまず玄関の電気が点いているのに気づいた。この時間は皆寝ている

はずなので明かりがついているはずはない、消し忘れかとも思ったがあの小煩い母さんに限ってそれはないだろうと結論づける。

恐る恐る玄関に向かうとそこには一人の男が座っていた……正座で。

「父さん……こんな時間になにやってんの」

玄関にいたのは父だった。何故か正座し、右足首には足枷のようなものが嵌められている。

「フツ……門限を破つちまってな」

何故かカツコつけて言っていたが状況が状況だけに全く格好良くはない。

「そーいや昨日は帰って来てなかったね。母さん凄く心配してたよ、遅くなるなら連絡くらいしてあげなよ」

「酒飲むとそういうの忘れちゃうんだよな」

我が家には門限がある。僕達子供は18時、父さんは22時だ。もちろん事前の連絡があればこの限りではないのだが父さんは決まって連絡しないで母さんを怒らせている。

昨晩も父さんは帰ってこず、母さんはラップを巻いた夕食の前で鬼の形相を浮かべていたのを覚えている。

「そもそも、門限なんてあるのがおかしいんだよな」

「それは以前父さんが浮気したからでしょ」

「だからしてねえっての……母さんの勘違いだ」

「どうだか」

今から半年ほど前、父さんが浮気をしているという事件があった。真偽のほども情報の出処もわからないけどとにかく母さんは怒った。もう父さんは仕事を辞めて家から一切出るなどまで言っていた。別れ話にならない辺り母さんは父さんのことが大好きなんだなと思った。まあ、そんなことがあり父さんには門限が設けられた、破れば今正座させられているようにお仕置きを受ける。

「まあいいや。朝まで頑張つてね」

「おいおい、この足枷外してくれよ」

「嫌だよ、怒られたくないし」

僕はそう言つて玄関をあとにしリビングへと向かった。後ろで父さんが冷たい息子だ……なんてぼやいているのが聞こえる。

リビングに入り明かりを点ける、深夜ということもあり部屋には誰もいない。僕は台所に移動し食器棚からマグカップを掴み冷蔵庫から取り出した牛乳を注いだ。

マグカップを片手にリビングにあるソファに腰掛けた。牛乳を一口飲み目の前のテーブルにマグカップを置く。あらかじめソファに置いておいた本を手に取り開いた。

本の作者は星真一、最近のお気に入りだ。

ペラペラとページをめくる。聞こえるのは僕が本を捲る音と外から聞こえるカエルの合唱だけ。本当に静かだった。

僕はこの時間が好きだ。一人で誰の目を気にすることもない自由な時間が。別に他の人が嫌いだとかずっと一人で生きていたいなんて言うつもりはない。だけど一人でいる時間は僕にとっては一種の充電のようなもので生きていく上で必要なモノだった。けれど僕の双子の妹……小春はそれを許してはくれない。

小春は常に僕の側にいる。小さな時はそれも当たり前だったけど今日から小学5年生になる僕にとってそれは既に当たり前ではなくなっていた。というかおかしいと思う。

小春は多分ブラコンってやつでしかかもツンデレってやつでもある。

以前、僕が小春に『お風呂には一人で入りたい』と告げたことがあった。小春は『あつそ、好きにすれば？』と応えた。その晩、僕は意気揚々とお風呂に一人で入った……が3分後には小春が乱入してきて言った。『クソ兄貴入ってたんだ、気づかなかつたわ』

他にも一人部屋が欲しいと小春に告げたことがあった。その時も小春はあつそ、とだけ応えた。僕は勉強机や本を空き部屋に移した……がその1時間後には小春の私物も全

てその空き部屋へと移されていた。

ストレートに『兄妹が四六時中一緒にいるのはおかしい』と告げると泣きそうな顔をされたので謝ったこともあった。

とにかく小春は僕から離れようとしな、四六時中側にいる。だから僕は一人の時間を確保する為に皆が寝静まった深夜を見計らってリビングへとやってくるのだ。

正直最近は何不足で授業中にうとうとしてしまう時もあるけどこの時間は僕にとつて必要だ、辞める訳にはいかない。小春が早く兄離れしてくれれば夜ふかしなんてしなくてすむのだが未だ妹にそんな兆候はまるでない。

もしかしたらこのまま一生小春と一緒に過ごす事になるのではと少し不安になった。

そんな僕の心を紙の擦れ合う音だけが癒してくれた。

□□□

「クソ兄貴、どうしてこんなところで寝てるのよ」

そんな不機嫌を隠そうともしない妹の声で目を覚ます。いつの間にかカーテンは開かれ窓から差し込む朝日が僕を照らしている。

「目を覚ましたら隣にあんたがいないから泣きそうに……じゃなくて、ビックリしたじゃない！」

「ごめん、夜中に目が覚めてなかなか寝付けなくてさ」

どうやら僕はソファで本を読みながら眠ってしまったらしい。危ない危ない、幸い小春には毎夜僕が部屋を抜け出しているとは気づかれていないようだ。がこんな事が続けば感づかれてしまう、気を付けないと。

「たくつ、今日から新学期なんだから夜ふかしなんてしてるんじゃないわよ」

そうだ、今日から新学期、僕は小学5年生になるのだ。もしかしたら小春とは別のクラスになることができるかもしれない。そうすれば小春は嫌でも僕とは別の時間を過ごすことになる、そしてそのままの流れで兄離れをしてくれるかもしれない。

「ほら顔洗ってきなさい」

「うん」

そんな新学期に対する淡い期待を胸に僕は洗面所へと向かった。もちろん小春と一緒に。

「あつそうだ、クソ兄貴。今日から転校生が5人来るらしいけどそいつらと関わっちゃダメだからね」

ショタコン型練巡：鹿島①

「いただきます」「いただきます」

「はい、召し上がれ」

春のあけぼの。顔を洗いさっぱりとした僕と妹は共に食卓に着く。今朝のメニューは白米、味付け海苔、ウインナーに目玉焼き、そして昨晩の残りの残りのお味噌汁だ。

醤油派の僕は目玉焼きに三滴、ついでにウインナーにも一滴醤油をたらしそれにかぶりつく、するとパリツクという音とともに僕の口内を肉汁が埋めつくした。僕はそこにかさず白米を一口咀嚼する。うん、今日も母さんの作る朝食は美味しい。

「クソ兄貴、さつきも言ったけど外に出たら気をつけるのよ?」

隣に座る妹、小春は僕が口を付けたウインナーを奪い去りながら意味の分からないことを言う。兄としてやられつぱなしではいられない僕は彼女の食器から食べかけのウインナーを奪い口に放りこんだ。しかし妹は何故か満足げだ。

「気をつけるって一体何にさ」

「変態によ」

「抽象的かつ非日常的で何を言いたいのかさっぱり分かんないんだけど……」

「なんでよ！変態に気をつけなさいって言うてるのよ！普通わかるでしょ！？最近は何騒
なんだから！」

どうやら小春は僕が不審者に目をつけられて誘拐でもされると思っているらしい。
だけど僕だって一応は男でそして兄としての矜持がある、頼りないかもしれないが妹に
そんな心配をされるのは遺憾だ。

「僕より自分の心配をしなよ。小春は女の子なんだから」

「……なに？あんた私の心配をしてるわけ？」

「まあ、そうだけど。双子とはいえ一応兄だし」

「兄……ね。まあいいわ。でもやっぱり気をつけるのはあんたよ。クソ兄貴は変態を寄
せつけやすい体質なんだから」

小春は味噌汁を啜りながらまた訳の分からないことを言う。変態を寄せつけやすい
体質ってなんだ。類は友を呼ぶ、言外に僕が変態だともいいたいのか。ブラコンの君
にだけは言われたくはない。

「特に年中スク水の変態、シヨタコンの変態、腐った変態、強姦魔の変態、ドSな変態、
盗撮魔の変態を見かけたなら直ぐに逃げなさい」

「嫌に具体的だし変態のバリエーションが多いわでお兄ちゃん困惑だよ……」

そもそもそれは見かけても変態かどうか判断できないのでは？年中スク水の変態は

直ぐに分かるが他ののは気づける自信がない。なんだよショタコンに強姦魔な変態って、腐った変態に至っては想像すらできない。この街はいつからそんな大変なことになっているんだ。

「ご馳走様でした」

僕のツツコミを無視し、小春は両手を合わせて完食の挨拶をしていた。相変わらず食べるのが早い。小春は食器を流しに持って行きながら僕に釘をさす。

「髪の毛セットしてくるわ。先に学校に行ったら許さないからね」

小春はそう言い残して洗面台に向かっていった。

小春の背中が見えなくなると僕は急いで残っていた目玉焼き、白米、味噌汁をろくに味わいもせず胃に流しこむ。

「ご馳走様でした」

妹に倣うわけではないが僕も流し台に食器を運んだ。そして息を潜める。抜き足差し足忍び足、小春に気取られないよう足音を殺しながら玄関に向かう。

幸運にも小春に気づかれることなく玄関に辿り着いた僕は昨晩用意しておいたランドセルを背負い、音をたてないように玄関の扉を開けた。

「……いつてきます」

誰にも聞こえないような小さな声でそう呟き、僕は一人で家を出た。

一人で外に出るのは何年ぶりだろうか。

僕は今日から小学五年生。心を許し合える親友はできるだろうか？妹は兄離れしてくれるだろうか？可愛い女の子と親しくなれるだろうか？

そんな期待と夢に胸を膨らませていた。

□□□

一人で歩く通学路はとにかく気楽だった。

いつもは小春と手を繋いで歩いていたら彼女の歩幅に合わせなくてはいけなかった。けれど今はその必要も無い。

何時も通つてるいる通学路だというのに一人で歩くと言うだけでまるで違う景色に感じられる。

本質的に僕は一人が好き人間なんだ。誤解の無いよう言っておくと、人と一緒にいるのが苦痛なわけでも、妹のことが嫌いなわけでもない。ただ、一日のうちに数時間、こんな風に一人でいる時間が僕には必要なのだ。僕にとっては言わば食事や睡眠のようなものだ。

人によっては常に誰かと一緒にいたいという人がいるというのも知っている。けど僕はどうしようもなく一人でいる時間が好きなのだ。何にも縛られず、気を使わず、ぶらりぶらりと歩きたいのだ。

現在の時刻は7時過ぎくらい、いつもより30分早く家をでた。遠回りをしながらゆつくりと登校しよう。

そもそも小春がいつまで経つても兄離れ出来ないのは僕にも責任の一端があるのかもしれない。彼女がいくら駄々をこねようと時には厳しく突き放す必要があったのだ。いくら僕達が兄妹だとしても……いや、兄妹だからこそだ。この先の未来、10年後には僕達は別々の道を歩まなくてはならないのだから。

そういう意味で今日小春に黙って家を出たのは正解だった。これを機に彼女には兄離れをしてみらおう。……してくれるかな……学校で会ったら怒られそうだな……怖いな……。いや、兄である僕が妹に怯えてちゃだめだ。小春のためにも兄離れしろとハッキリと言ってやらなくちゃ。きつと彼女だつて分かってくれる。

「それにしてもいい天気だ」

気持ちを切り替えて僕は住宅街の一本道を進む。四月になったばかりの空は爽やかに晴れ渡り、誰の家ともしれない庭に生えている木々が風になびかれカサカサと揺れていた。

いつもなら妹に掴まれている腕を僕は目を瞑ると共に太陽に掲げて伸びをした。全身の緊張が解れていくようだ。昨夜夜更かしたこともあり、春の陽気に温められた僕を眠気が襲いはじめた。

僕は伸びをやめると目を瞑ったまま前にすすんだ。障害物もない一本道だし何かにつかることはないだろう。

「あいたつ」

っと思つたが僅かに三步進んだだけで何かにぶつかつた。おかしい、流石に三步進んだだけでぶつかるような物はなかつたはずだ。僕は目を開けて前方を確認する。

目を開けると二本の太ももがコンクリートから生えていた。ちがう、僕が小さいから至近距離だと太ももしか見えないだけだ。僕は三步下がって少し首を上に向ける。

「提督さん、大丈夫ですか?」

そこにはお姉さんが立っていた。銀色の髪に人形のような日本人離れた整つた顔立ち、だけど着ている服は某有名コンビニエンスストアの青と白の縦ストライプといった妙に親近感を覚える格好だ。だれだろう、この辺じや見かけない人だ。

「ごめんなさい。次からはちゃんと前を見て歩くようにします。それでは」

僕は頭を下げてお姉さんの横を通り過ぎようとした、だけどお姉さんは僕の肩をつかみ引き留める。なんだろう、カツアゲでもされるのだろうか。

「ちよつちよつと待つてください。少しでもお姉さんとお話ししてくださいませんか？ほら！お菓子もありますよ！」

「……知らない人からお菓子を貰うなど母さんと妹にきつく言われてますので」

「くつ、流石は曙ちゃん。息子さんの教育は抜かりないということですか」

銀髪のローソンお姉さんは悔しそうに歯噛みをしながらそんなことを言った。それにしては曙ちゃん？それは僕の母さんの名前だ、母さんを知っているのだろうか？

「お姉さんは母さんの知り合いなんですか？」

「そうですよ。因みに貴方のお父様とも面識があります」

「……あなたでしたか」

「……？何がですか？」

「父さんの浮気相手です」

「えっ!？」

半年前、我が家では父さんが浮気をしているのではないかという疑惑が浮上した。母さんがどこから仕入れた情報かは分からないがタレコミがあつたらしい。父さん本人は否定したがあの時の母さんはとても怒り、父さんを数日間監禁したほどだ。あの時の母さんの怒りようときたら……僕は結婚しても絶対に浮気はしないようにしようとして0歳にして決意するほどだった。

「何故そう思うんですか？そもそもお義父さま浮気したんですか……」

「根拠はありません。父さんはしがないエンジニア会社の社員です。お姉さんのような若くて綺麗な女性と接点なんてある筈がありません。なのにお姉さんは父さんを知っている……つまりそういうことですよ？」

「フフっ、やけに大人びていると思いましたがやっぱりまだ可愛いらしいですね。その推理は外れです」

「違いましたか」

「はい、この制服を見てもらえば分かる通り、私はローオンさんでアルバイトをしています。貴方のお義父さまはそのお客様でした。お義父さまは昔、毎日のように私のいるコンビニに来て下着を購入し、私は店員としてお会計をする。それだけの関係でした」

「それはそれでおかしいです……」

うちの父さんはなにやってるんだ……なぜ毎日下着を買いにコンビニへ……やつぱり浮気かもしれない。

「それに貴方のお義父さまが引き起こした『艦娘戦争』私あの戦いにも参加していません」

艦娘戦争……15年前に提督である父さんを取り合って艦娘さん達が戦ったという……結果、『駆逐艦：曙』である母さんが勝利して父さんと結婚したのだと聞いている。

「艦娘戦争……ということはお姉さんも艦娘なんですか?」

「はい、練習巡洋艦、鹿島です。提督さんよろしく願いますね。フッフ」

「よろしくは……できないです。ごめんなさい」

僕がそう答えると鹿島さんはとても悲しそうな表情を浮かべ、僕の心に罪悪感を突き刺した。

「どうしてそんな悲しいことを言うんですか? 鹿島のことお嫌いですか?」

「父さんと妹にいつも言われてるんです『艦娘を見たら直ぐに逃げろ。あいつらは変態だから捕まればめちやくちやにされるぞ』って。だから僕は今から逃げないといけないんです」

「変態って……酷い言われようですね。提督さん、私、そんな風に見えますか?」

「見えますね。普通のお姉さんです」

「そうですね? 確かに115年分の性欲が発散できず理性を失ってしまった艦娘は大勢います。不知火さんなどは強姦型駆逐艦……通称強姦娘ごうかんむすと揶揄されるほどです。ですが、そうでない艦娘もいるんですよ? 貴方のお母さんだって変態さんではないでしょう?」

「……確かにそうですね」

「ですからそんな風に言われては私も傷つきます。それも貴方、提督さんから言われた

のでは尚のことです」

確かにそうだが、父さんや小春から艦娘は例外なく変態だと聞いていたが僕は経験としてそれを知っていた訳ではない。ただなんとなく、いわれるがままにそう認識していただけだ。現に目の前の鹿島さんは普通だ、それに何かされたわけでもない。なのに変態扱いは失礼すぎる。

「すみません。先入観に囚われていました」

「分かって貰えたならいいんです。ただ……鹿島をお願いを一つだけ聞いて貰えませんか？」

「僕にできることなら……」

小学5年生の僕に何ができるかは分からないけどごめんなさいの意味として鹿島さんのお願いを聞くことにした。

「やったー！」

鹿島さんは嬉しそうに両手を合わせて軽くジャンプした。瞬間、微かなブルーベリーのような香りが漂った。うん、やっぱりこんなに綺麗でいい匂いをする人が変態なわけがない。やっぱり父さんと小春の言うことは当てにならない。

「お願いなんですけど……」

鹿島さんは両手の指を合わせてモジモジ顔を赤らめながらいう。

「提督さんの包〇おちん〇んの皮を……剥かせてもらいたいなって」
僕は全速力でその場から走り去った。

腐敗型潜水艦：伊13①

ローソンの制服を着た変態お姉さんから命からがら逃げ出した僕はそのまま学校へと向かった。

小春を置いて家を抜け出した手前、彼女と会うのは少し気まずい。と言うより捕まればまず確実に何かしらの罰を受けるのは目に見えていたので僕は正門を迂回し裏門から校内へと入る。

そこまでは良かったのだが……今日が新学期初日というのが不味かった。他の県ではどうなのかしらないが僕達の住む地域では新学期初日は、クラス替えのリストを下駄箱へと張り出すのだ。つまり僕は下駄箱へと向かわなければ自分のクラスを知ることができないのだ。

当然、小春もそんなことは承知の上だったようで、下駄箱のクラス配置表前の人混みの前で腕を組み、般若の形相で仁王立ちしている。

やばいなあ……めちゃくちや怒ってるじゃんあれ……。

捕まればナニをされるか想像するだに恐ろしい。どうにかして小春に見つからないようにクラス配置表を確認しなければならない。妖精さんを出そうかな？でも妖精さ

んの力を使うと母さんも小春も洒落にならないくらいに怒るから出来ればそれは最後の手段にしよう。

下駄箱の陰に隠れうーん、うーんと思索していると軽く肩を叩かれた。誰だろうと振り返るとそこにいたのは見たこともない女の子だった。

「提督？ どう……したんですか？」

その声と表情にドキリとした。黒く、短く切り揃えられた髪にか細かい声。さらに細いのは声だけでなく、その体も少し触れれば折れてしまいそうなくらいに華奢だった。

綺麗な子だなと思った。小春も美人だとは思いますがまた系統が違う。花で例えると前向きでだけ少し棘のある小春は『曙草』、目の前の彼女は儂さを思わせる『ワスレナグサ』といった印象だ。

なるほど、僕はこういう娘がタイプなのかとこの時初めて理解した。何時も僕の周りにいた女子は気の強い子ばかりだったせいなのか、こういった大人しく、どこかミステリアスは雰囲気を持つ彼女のような女子を僕は好ましく思う傾向にあるらしい。その証拠にドクドクと今までに感じたことのない心臓の高鳴りと緊張を僕は感じていた。

ただ……彼女は僕の事を『提督』と呼んだ。つまりそれは彼女が『艦娘』であることと同時に小春が言うところの『変態』であることも示唆している。

『提督さんの包〇おちん〇んの皮を……剥かせてもらいたくなって』

先程遭遇した変態お姉さんの言葉がフラッシュバックした。あのお姉さんが艦娘ならこの子も同類ということになる。残念だな……こんなに綺麗な子なのに変態だなんて……。

「君も——変態なの？」

現代日本ではまず口にする事のないその現実感のないセリフに僕ははたと正気に戻った。

僕は一体何を言っているんだ。確かに目の前の少女は僕のことを提督と呼んだ。彼女が小春や父さんが言うところの『艦娘』であるのは間違いない。けど——逆に言ってしまったえばそれだけでしかない。艦娘＝変態であるというのは小春や父さんが僕に植え付けた先入観でしかない。先程のローソンのお姉さんといった例もあるがそれだつてこの娘とは何の関係もない話だ。

つまり、僕の今の発言は人の尊厳を踏み躪る人種差別に他ならない。黒人だから、オタクだから、そんな発言が許されないと同じように艦娘だから変態、等と言うことは決してないのだから。

「ごめん！僕は今、君にとっても失礼なことを言った」

僕は直ぐに少女に頭を下げた。反応がない、怒っているのだろうか？恐る恐る顔を上げて少女の顔を覗き見た。

「どうして……謝るの？」

少女は軽く首を傾げ、そんなことを言った。ああ、本当になんて優しい子なのだろう。僕が気を病まないように、そんな風に気を使ってくれるなんて。やっぱり父さんや小春の言うことは嘘だったんだ、こんな優しい子が変態でなんてあるはずがない。

「いや、僕は君に失礼なこと言ったから。初対面の君に変態だなんて絶対に言っちゃいけないことだった」

「なる……ほど。でも気にしなくていいです。間違いではありませんから」

「え？」

「それで……そんな所に隠れてどうかしたん……ですか？」

少し気になることを言っていたが直ぐに少女が話題を変えたのでそれ以上は聞けなかった。もとより僕の失礼が招いたのだ、態々墓穴を掘ることもない。

「いや、クラス表を見に行きたいんだけどね。あそこにいる地獄の門番、アケボロスが邪魔をするんだ」

「アケボロス？」

女の子はキョトンと首を傾げ僕の視線の先にいる小春を見た。すると直ぐに納得したように「ああ、曙さんのこと……」と、そう呟いた。

小春が『曙』であることを知っている。この学校でその事実を知るのは先生達とこの

学校にいるもう一人の提督である所の今吉くんだけだ。なのにそれを彼女が知っているとということはやっぱり彼女も艦娘だからなのだろう。

「私が見てきて……あげます」

「あつ、ちよつと」

僕の制止も聞かず女の子はテトテトとクラス表の方へと向かい、直ぐにこちらへ戻ってきた。

「F組でした」

「えつと、ありがとう……」

「いえ、それでは」

「あつ、待って！」

僕はクラスを告げ身を翻し去っていく少女を引き止めた。

「君の名前教えて貰えないかな？」

「伊号……いえ、ひとみ。そう呼んでください」

そう簡素に僕に告げると瞳は今度こそ僕に背を向けて去っていく。僕も名乗りたかったけど聞き返してくれなかったということはそのうことなのだろう。僕は鈍く痛む胸を押さえながら去っていくひとみの背中を見送った。

すると、ポトリとひとみのカバンの隙間から小さく薄い板のような物が零れ落ちた。

しかし、新学期の喧騒もあつてひとみはその事に気づいていない。僕は慌てて駆け寄つてそれを拾い上げた。

「これって……本？」

本だった。ブックカバーに覆われ表紙は見えないけれど側面から除く白い紙の層は間違いなく本だ。けれど、異様なまでに薄い。昔から読書が趣味だった僕はこれまで多くの本を読んできたけれどここまで薄い本には出会ったことがない。板チョコよりも薄いだなんて信じられない。

———どんな本なのだろう

僕はその本の内容がとても気になった。元々、本好きでさらにそれが少し気になる女の子の物だというのだから尚更だ。

ダメだと分かつていても止められない。僕は手に持つそれをゆっくりと開いた。

「なっ———なに、これ、」

余りに衝撃的な本の内容に僕は息を飲んだ。小説かと思っていたそれに描かれていたのは絵だった。それも只の絵ではない、所謂春画という物で紙いっぱい人の痴態が描かれている。

別にこういう本をひとみが読んでいるからといって僕はそれに対して何かを思つたりしない。つい先程、偏見は良くないということをもつて実感したばかりだ。

けれど、けれどこれは――

「なんで僕と今吉くんが……」

その本に描かれているのは裸の『裸の僕』と『もう一人の提督である今吉君』だった。男性同士の恋愛、所謂BLというものの存在を知識としては知っている。それが可笑しい事だとも思わない。しかし、そこに描かれているのが僕本人と友人となれば話は変わってくる。

いや、え？ 本当にこれはなんなの？ なんでこんな物が？ 誰が何の為に？ 何故ひとみがこの本を？

分からない。理解できない。考えれば考える程に混乱する。

僕はそつと本を閉じてそれを鞆にしまい込んだ。

やっぱり艦娘には変態しかいないのかもしれない。

ブラコン型駆逐艦：曙②

深海棲艦という生き物がその昔、この地球上には存在していたらしい。それらはとても凶悪で残忍で無慈悲なとても恐ろしい化物だったと今も僕達の世代に語り継がれている。

けれど僕は思うんだ。深海棲艦がどんなに恐ろしい奴らだったか知らないけど、きっと——母さんや小春がマジギレした時の怖さには敵わない。相手にもならない。

廊下で僕を押し倒し、目を血走らせながら今にも角が生えそうなほど怒り狂う妹を見て、どこか他人事のようにそう思った。

「二応、言い訳を聞いてあげる。私何時も言ってるわよね？クソ兄貴は変態を寄せ付けやすい体質なんだから一人で行動するなって。なのにどうして私を置いて先に家を出たの？答えて、早く」

怖い。小春が怖いのは何時ものことなのだが今日はさらに怖い。逃げ出そうと両手に力を入れ、馬乗りになる小春を退かそうとするが、彼女に掴まれた僕の両手首はピクリとも動かない。悲しいかな、兄である僕の腕力は妹の彼女に遠く及ばない。

いつもならこの時点で僕の負けだった。小春に捕まった僕はただ彼女に平謝りし許

しを乞う。だけど今日の僕は違う。言うんだ、僕は一人が好きなのだ、小春もそろそろ兄離れしなくちやいけなよと。きつと小春は世間一般でいう所の『ブラコン』になりつつある。小春が悪いわけじゃない、僕が今まで彼女を拒絶しなかったから——だからこうなってしまった。小春を兄離れさせるのは他でもない、兄である僕の仕事なのだから。

だから——言わなくてははいけない。

「はやく答えなさい。ど・う・し・て！私を置いて行つたのか！」

「小春へのサプライズプレゼントを用意したかつたんだよ……」

どうやら僕は兄失格らしい。



雑すぎる嘘で小春の怒りを沈めた僕は彼女に手を引かれ教室へと入った。そういえば小春さん、当然のように今年も僕と同じクラスなんだね……ちくしょう。

「あつ、こら良治！アナタまたどこ行くのよ！私の側にいなさいよ！」

「ふざけんな！女となんて一緒にいられるか！俺は男友達と遊ぶんだ！」

教室に入るとそんな騒がしいやり取りが僕達を出迎えた。声の主は僕の友人であり

『もう一人の提督』でもある今吉くと、彼の幼馴染である天津風さんのものだ。良かった、今年も今吉くと同じクラスだ。

「おっ!!お前もこのクラスなのか!やったな!今年もよろしく!」

僕に気づいた今吉くんがひまわりのような笑顔と共に駆け寄ってきた。「あっち行こうぜ!さつき友達になつた奴お前にも紹介するよ!」そう言つて今吉くんは僕の手を引く。

僕はチラリと小春を覗き見た。先程怒らせたばかりだ、また勝手に離れて怒らせる訳にはいかない。

すると小春はするりと手を離し、「私の目が届かないところには行かないこと」とらしくないことを言つた。

「いい……の?」

「そう言つてるじゃない。その……私も思う所があるのよ」

「そっか……小春もようやく兄離れしてくれるんだね」

「は?」

どうやら僕の勘違いだったらしい。本当に、ただの気まぐれなのだろう。僕は逃げるようにして今吉くと共に新たなクラスメイトの元へ挨拶しに行った。だが、依然として小春の蛇のような視線が僕の背中を這っている。気になってしまいそちらへばかり

意識が向く。

「曙、良いわね貴方のところの提督は素直で。私の提督なんてほんとにヤンチャで……羨ましいわ」

「天津風……そんなことないわ。大人しそうに見えるのは表面だけ、アイツも一人にすると何をしでかすか分からないんだから。この間なんて妖精さんを出してコソコソ何かやってたのよ？」

「ああ……それはダメね。妖精さんだけは出させちゃだめ。私もあの人にそれだけはキツク言っておいた。分かってくれたのかどうかは分からないけどね。彼、私の言うこと全然聞いてくれないから」

「お互い苦労するわね、天津風」

「ほんとよ」



予鈴が鳴り僕達は黒板に張り出された座席表に従ってそれぞれの椅子に座った。しかしながらここで一つ不測の事態が起こった。

僕達の学校は生年月日順でそれぞれの生徒に出席番号が与えられ、席順等はその出席

番号によって決まる。つまり、双子であり誕生日が同じである小春は今まで必ず僕の後ろの席にいたのだ。

だが今回、僕と小春の席の間には一席の空席が設けられていた。誰が座るでもなく、ただぼっかりと主人のいない机が僕と小春に距離を設けてくれていた。

「なんなのよ——これ」

小さくガツポーズする僕とは対照的に小春は世界が滅ぶかのような表情で絶望している。しかし次の瞬間に小春はその空席へと移動し自身の荷物を机の中へと移し始めた。

「ちよつと！小春なにしてるの!?!そこは小春の席じゃないよ!」

「うるさい！別にいいでしょ誰も座ってないんだし」

「そこは空席ではありません」

突如僕の後ろから誰かが小春を諫めた。振り返るとそこにいたのは大人の女性だった。白筒袖に青い袴という、凡そ小学校には不釣り合いな格好、特に印象的なのはその感情を読み取らせない成熟した佇まいと眼つきだ。だれだろう、こんな人は見たことない。

「加賀です。本年度よりこの学校に赴任しました。よろしく願いまするわ」

僕が困惑した視線を向けていると青袴の女性はそう名乗ってくれた。加賀——どこ

かで聞いた名だと思った。確か――

「空席じゃないってどういうことよ。というか貴方がいるなんて私聞いてないんだけど？」

「言えばまた先手を打たれるのは分かっていたもの。けれど転校生が来ることは聞いていたのではなくて？」

「転校生って……まさか」

「そうよ。だから自分の席に座りなさい。ホームルームを始めます」